月影

第69号

令和三年三月一日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院

牛、水を飲めば
乳となる
蛇、水を飲めば
毒となる

正しい教えが
すべての人々を
正しく導く
とは限らない

聞き手の
心の有り様や
縁によって

その教えは
悟りにも導き
迷いをも生む

開宗八五〇年 法然上人の生涯

【六】

阿弥陀仏の本願

探し求めて

法然上人は、比叡山にもどってから、大量の経典書物が収められた経蔵に入り、自らの求める「すべての人々を救う」教えをひたすら探し続けました。

そして、長い年月が流れ、一一七五年（承安五年）法然上人四十三歳の年。法然上人は、唐の善導大師が記した次の一節を見つけます。

善導大師の言葉

一心に専ら
弥陀の名号を念じ、
行住坐臥に
時節の久近を問わず、
念々に捨てざるもの、
是を正定の業と
名づく。
彼の仏の願に
順ずるが故に

〝「南無阿弥陀仏」と一心に仏の名を称え、行動している時も、とどまっている時も、座っている時も、寝ている時も、いついかなる時でも心を込めて念仏を称えること。これこそが正しく往生できる行である。なぜなら、それが阿弥陀仏の衆生を救うという誓願にかなっているからである〟

法然上人は、この一節を見つけたとき、すべての人々を救う教えは、自らの力（自力）で叶うのではなく、阿弥陀仏が願われた力（他力）によって叶うことを知りました。

阿弥陀仏の願い

阿弥陀仏という仏さまは、仏さまになる前は、法蔵菩薩という菩薩さまでした。法蔵菩薩はすべての人々を救うために、四十八の誓願を立て、「この誓いを叶えることができないならば仏とはならない」と誓われ、長い修行の末に阿弥陀仏となられました。

四十八の願いの一つに、「私の名を呼ぶものを必ず往生させる」という誓いがあります。つまり、南無阿弥陀仏と称える者を極楽へ往生させると約束されているのです。

その阿弥陀仏の誓いを知った法然上人は、いつでもどこでも誰でも称えられるお念仏が、すべての人々を救う唯一の道であることを確信されました。

仏事と作法

葬儀式(一)

葬儀式とは

人生には、いくつかの節目の行事があります。七五三、成人式、結婚式…。そして、人生最後となる節目の行事が葬儀式です。

枕経から骨上げまでの一連の法要を葬儀式として、その意味や意義を改めて見ていきたいと思います。

葬儀式の意義

浄土宗の教えは、人は亡くなるとお念仏によって、すぐに阿弥陀様が迎えに来てくださり極楽浄土へ往生すると説かれています。

葬儀式とは、故人が仏弟子となる為に、仏教徒が守るきまりである戒を授かり、極楽へ往生していくことを確認する儀式です。

また、残された遺族にとっては、大切な人が亡くなったということ、もうこの世からいなくなるということを皆で共有し、一緒に故人を弔うために行う式です。

そして、式を通して、いつかは誰もが命尽きる時がやって来て、極楽浄土へ往生していくということを実感する式といえます。

葬儀式の変化

葬儀の在り方も、時代とともに大きく変化してきました。

昔は、自宅で通夜葬儀を行い、隣近所の人たちがお手伝いにあがり、遺族はただ座っているだけで、準備が整っていたと聞きます。

家族だけではなく、地域の人たち皆で故人をお浄土へ送り出し、皆で悲しみを共有し合うことができていました。

しかし、現在では葬儀式のほとんどが葬儀会館で行われるようになり、自宅で行うことは珍しくなってきました。

式の規模も縮小、簡略化され、家族だけで行う家族葬が登場したことで、最近見かけないと思っていたら亡くなられていた…。という話を聞くことも少なくありません。

葬儀式は、故人を弔い、残された人の気持ちを癒す大切な役割を担っています。

時代と共に、弔う形が変化しても、弔いたいと想う心は同じなのです。

（つづく）

仏教歳時記

お水取　済みたる闇に　鹿のこゑ

深川知子

お水取り

奈良の東大寺二月堂で営まれる修二会の法要中、最も有名な行法。十二日午後七時。松明の火の粉を四方に散らしながら回廊を走り回り、十三日午前二時。お水取が始まります。若狭井の霊水を汲み上げ、ご本尊の十一面観音にお供えします。

東大寺二月堂

雑記抄　～吾唯足知～

「幸せ」とは、心が満たされている状態のことをいいます。しかし、人は満足しても、すぐに次の欲が起こります。煩悩の一つである欲（貪りの心）がある限り、心が満たされることはないのでしょうか▽「知足の者は貧しと雖も富めり、不知足の者は富めりと雖も貧し」お釈迦様の言葉です。足ることを知っている者は、貧しくても心は満たされる。足ることを知らない者は、お金持ちでも心は満たされない▽無いものにばかり目を向けないで、今あるものに感謝をする。これが心を満たすための最善の方法だと言っておられます▽京都の龍安寺に水戸光圀公が寄進された有名な「つくばい」があります。「吾、唯、足るを知る」お釈迦様の言葉をあらわしたものです▽自粛生活をしている今、「足るを知る」ことの大切さを思います。当たり前と思っていた生活は、実は有難いものだったのだと気づかされます。

龍安寺のつくばい